氏　　名	赤枝 香奈子	所属 京都大学大学院文学研究科 COE 特定助教
研究テーマ	フィンランドと日本における同性間の親密な関係 ―『ムーミン』の受容と作者トーベ・ヤンソンの生涯 Intimate Relationships between Same Gender Persons in Finland and Japan: The Reception of Moomin and the Life of the Author Tove Jansson	

【派遣先大学・研究機関・研究科名】 ユバスキュラ大学社会科学部、社会科学・哲学科
University of Jyväskylä, Faculty of Social Sciences,
Department of Social Sciences and Philosophy

【派遣先都市・国名】　ユバスキュラ・フィンランド

【派遣期間】　2009 年 5 月 27 日　～　8 月 24 日

【受入研究者】　Prof. Pekka Korhonen

【授業を担当した講義名】

Asian Families and Intimacy
担当分：Gender and Sexuality in Modern Japan:
The Reception of Western Romantic Love and Sexology

【教育、研究面の成果】

◆教育

2009 年 6 月 25 日、26 日に、下記のテーマで授業をおこなった。

Asian Families and Intimacy

（担当分：Gender and Sexuality in Modern Japan:
The Reception of Western Romantic Love and Sexology）

第 17 回：Introduction
第 18 回：Discourse of *Seito*, Part 1
第 19 回：Discourse of *Seito*, Part 2
第 20 回：Girls' Letters and the Impact of Sexology

講義内容：

家族も含め、理想的な親密な関係は時代によって変化する。その変化は、法制度や産業構造の変化はもちろん、ジェンダーや性、再生産についての知識によっても影響を受ける。それゆえ、近代日本の親密圏にかんしても、進んだ西洋の国々に追いつきたいと願い、ジェンダーや性にまつわる新しい知識を吸収した知識人たちが重要な役割を果たした。その種の知

識によって最も大きな影響を受けたのが、男性同士の親密な関係であった。このような関係は、明治初期まではむしろ賞賛されていたが、19 世紀末頃から新たに導入された西洋の性科学によって、「アブノーマル」「異端」「退化」などネガティブな意味合いをもつ「ホモセクシュアルな」関係とみなされ、批判されるようになった。逆に、女性同士、特に教育を受けた若い女性同士の親密な関係が、近代になって新たに登場し、近代化の過程で増えていった。なぜならば、これら新中間層の女性たちは、新たな家族形態である「近代家族」の主たる担い手とみなされ、他の家族構成員と良好な関係を築くことが求められたからであり、女性同士で親密な関係をもつことは、将来の親密な関係―特に夫婦間の親密な関係―の訓練になると考えられたからである。一方、当の女性たちは、女性同士の親密な関係を、「ロマンティック・ラブ」の実践とみなしていた。ロマンティック・ラブもまた、西洋から導入された概念であり、パートナーとの対等で永続的な、精神的絆を重視していた。しかしジェンダー差の大きい当時の日本においては、男性とそのような関係を築くことは不可能で、女性同士の間でのみ可能だったのである。

ロマンティック・ラブについては、近代以降、日本に輸入された理想的関係として、これまでもその受容プロセスや、影響の度合いについて議論されていた。この授業では、近代日本におけるロマンティック・ラブの受容を再検討し、その過程で女性同士の親密な関係が果たした重要な役割について議論した。

なお、この授業は以下の URL で公開されている。
http://moniviestin.jyu.fi/ohjelmat/ytk/en/worldpolitics/asia-s-new-mothers-and-fathers/xvii-akaeda-kanako-introduction

◆研究

本研究では、世界的に人気のあるフィンランドの児童文学『ムーミン』と、その作者トーベ・ヤンソンの生涯に注目し、それらに現れた親密な関係を手がかりにしながら、フィンランドと日本における規範的家族像の形成過程およびその変容について比較研究をおこなった。

現在、欧米の一部の国や地域では、同性同士のカップルを正式なカップルと認め、男女の夫婦と同等、もしくはそれに準じる権利、保護を与える同性婚やパートナーシップ登録制度が導入されている。このことは、一家の大黒柱である男性と専業主婦であるその妻、そして二人の実子からなる家族を標準と考える「近代家族」の時代から、多様な家族のあり方を認める時代への変化の表れとみなされうる。そのような中、近年、『ムーミン』の物語世界とトーベ・ヤンソンの生き方に新たな光が当てられている。『ムーミン』は、近代家族には当てはまらない家族関係、親密な人間関係を描いた作品として、またヤンソンは同性のパートナーと生涯をともにしたパイオニアとして、再評価されつつあるのである。

日本には、上記のような同性婚やパートナーシップ登録制度は存在しない。また、『ムーミン』は現在でも人気があるものの、ヤンソンの生涯については依然として「電気もガスも

水道もない孤島で一人暮らしをした女性」として紹介され続けている。このようなギャップは、日本において依然として近代家族規範が根強く、それ以外の家族形態、特に同性同士の親密な関係について否定的であることを示している。一方、北欧諸国は世界に先駆けて、同性間のパートナーシップ登録制度を導入し、同性婚もスウェーデン、ノルウェーで認められている。何がこれらの違いを生み出しているのか、トーベ・ヤンソンの生涯を手掛かりにしながら、多様な家族形態に寛容な社会的・文化的背景を明らかにすることをめざした。

渡航後はまず、2009 年 5 月 28～30 日にヘルシンキ大学で行われた、第三回 Gendering Asia Network Conference に出席し、北欧におけるアジア研究の現状を把握し、日本における親密圏の変容を、比較社会学的に検討するための手がかりを得た。

（参考 URL：http://www.law.tohoku.ac.jp/gcoe/ja/archive/event_090528-30.php）

滞在期間中は、主にユバスキュラ大学にて文献・映像資料収集、調査をおこなった。また、フィンランド第二の都市であるタンペレに赴き、ヤンソンの原画の大半と、『ムーミン』の立体作品が所蔵・展示されているムーミン谷博物館を見学した。ヘルシンキでは、ヤンソンとその「ライフタイム・パートナー」であるトゥーリッキ・ピエティラのドキュメンタリー映画 3 本を製作した、Kanerva Cederström 教授（The University of Art and Design Helsinki）にインタビューをおこなった。

その結果、ヤンソンの生涯は、日本で紹介されているようなストイックな女性作家のイメージからはほど遠く、また自活可能なアーティストであったがゆえに、より自由な生活を享受できたこと、それは「孤島の一人暮らし」と紹介されてきた、しかし実際には「パートナーとの長いバカンス」ともいえる島暮らしに象徴されていることが明らかとなった。ただしフィンランドのジェンダー規範、セクシュアリティにまつわる法制度の変遷をたどる中で、ヤンソンの生涯も、そしてそれに対する社会的評価も、時代の制約を受けていたことが明らかとなった。